

# 教授就任挨拶

## 熊本大学大学院生命科学研究所 産科婦人科学講座



教授  
近藤 英治

令和三年（二〇二一年）六月一日付  
で熊本大学大学院生命科学研究所産  
科婦人科学講座の第十代教授に就任い  
たしました近藤英治と申します。熊本  
に着任し早いもので一年を迎えますが、  
この間、皆様に温かいご理解とご支援  
を賜り厚く御礼申し上げます。

私は幼少期は山と海に囲まれた大阪  
南部の箱の浦で育ち、中学・高校は鹿  
児島のラ・サール学園で学びました。  
平成十年（一九九八年）に京都大学を  
卒業し、当時藤井信吾教授の主宰され  
ていた産婦人科に入局しました。京都  
大学及び関係病院で臨床研修を受けた

後、大学院に進学し留学中に研究の楽  
しさに目覚め、帰国後は京都大学で臨  
床・研究・教育に没頭する濃密な日々  
を送ってきました。

当教室を主宰させていただき驚いた  
ことは熊本県における産婦人科医師不  
足の深刻さでした。現在も、県内の各  
地域は言うに及ばず、大学や熊本市内  
の中核病院ですら診療体制の維持が危  
ぶまれる状況です。前任の片渕秀隆先  
生が手塩にかけて育ててくださった一  
騎当千の勇士たちが懸命に教室を支え、  
関係病院も強い使命感を持った大先輩  
と若い医師が守ってくれております。  
しかし、中長期的な視野に立ち県内の  
医療体制を考えると、現場の医師を  
守り診療・教育体制を立て直す必要が  
あると判断し、いくつかの病院には  
“we shall return” という強い思いを  
抱きながら撤退という苦渋の決断をお

伝えしたこともありました。県内の産  
婦人科医師不足を短期間で解消する方  
法は残念ながら無いのですが、私は現  
実的な楽観主義者として、この現状を  
チャンスと捉えて県、学会、医会と力  
を合わせ、十一・二十年後には若い有  
望な教室員が国内外で多数活躍する姿  
を思い描いています。

私が今なすべきことは逆境に負けず  
前線で踏みとどまっている勇士の背中  
を押し、そして同じ志を持つ次世代の  
産婦人科医師を育成することです。一  
人一人が目標を持ち、多忙な日常の中  
でもワクワクできるよう、この一年学  
習環境を整備してまいりました。県内  
に安心・安全な鏡視下手術を普及させ  
るため熊本産科婦人科内視鏡研究会を  
設立し、大学における子宮悪性腫瘍に  
対する腹腔鏡下手術の件数は順調に増  
加しています。またロボット支援下手  
術を三月より導入し、屋根瓦方式で鏡  
視下手術の人材育成を行っています。  
周産期医療についても、学会と医会  
の共催で熊本M&Mカンファレンス  
(Maternal Mortality and Morbidity  
Review Committee) を創設し、県内  
の周産期医療の質的向上を目指してい  
ます。今後は産婦人科のサブスペシャ

リティである骨盤臓器脱を対象とした  
ウロギネコロジー、がん生殖医療や着  
床前診断、遺伝カウンセリングなどに  
携わる人材を育成できる体制を関係す  
る教室と協力して構築したいと考えて  
います。研究面でも世界をあとと驚か  
そうと妊娠高血圧腎症や早産、妊産婦  
メンタルヘルスに関する研究を基礎の  
教室や企業とも連携し開始しておりま  
す。近年の入局者は女性医師が過半数  
を超え、家事・育児をしながら勤務し  
ている教室員も珍しくありません。ま  
た、男女を問わず、我々は家事・育児  
以外にも様々なことを抱えながら仕事  
をしています。現在、リクルートと並  
行し、教室員が自身の状況に応じなが  
ら研鑽を積める時間を確保できる勤務  
環境を整備しようとして模索しています。  
大学は次世代の人材育成拠点であり、  
各人が時間的・精神的・経済的に余裕  
を持ち、臨床のみならず大学の醍醐味  
である研究や教育の分野でも活躍でき  
る教室づくりを推進いたします。

当教室が、多くの人が自然と集い、  
真のプロフェッショナルを数多く輩出  
する教室になることを強く信じ全力疾  
走しますので、ご指導ご鞭撻を賜りま  
すようよろしくお願い申し上げます。